

児童養護施設において性（生）はどのように語られているのか

—直接処遇職員と子どもの関わりに着目して—

大阪大学大学院 木原琴 (009729)

キーワード：児童養護施設、性（生）、隠れたカリキュラム

1. 研究目的

児童養護施設の子どもの性（生）に対する直接処遇職員（以下、職員）の眼差しを分析することで、性（生）のあり方の規範として意識的、また無意識的に存在する「隠れたカリキュラム」（白井 2019,47）について実態を把握し、発生構造を分析する。

2. 研究の視点および方法

研究の視点：性は、独自性・多様性を表し、「生きる」ことそのものと密接に関係する。言わば、オプションな概念ではなく権利である。この観点を基盤に「性（生）」と表記する。先行研究を概観すると、児童養護施設における性（生）に関しては、子どもの性的問題行動に着目しているが、問題行動にまで発展していない性（生）全般にまつわる事柄への着目は不十分である。また、性的問題行動について検討した研究は、対応の効果を測るために子どもに焦点を当て、職員への着目は十分とは言えない。子どもの生活支援を担う職員が行う、当たり前とさえなっている生活の中での性（生）の育みが等閑視されている。この点に関連して、白井（2019）は、児童養護施設において「ジェンダー やセクシュアリティに関する『隠れたカリキュラム(hidden curriculum)』を正当化する根拠があるという姿勢」（白井 2019:47）を持つことを述べた。いわば、典型的な性のあり方を肯定する暗黙知である。本研究の視点として、この「隠れたカリキュラム」を用いる。

方法：参与観察とインタビュー（半構造化面接）を用いた。参与観察は、児童養護施設 A にて職員と子どもを対象に、2018年12月から2020年3月に概ね週1回以上実施した。半構造化面接は、職員10名を対象に2019年4月から5月に実施した。施設 B から施設 I の計8施設の職員に協力頂いた（表1参照）。

調査協力者	性別	年齢	職歴	児童養護施設
①	女性	20代前半	2年	B
②	女性	30代前半	7年	C
③	男性	20代後半	2年	D
④	女性	20代前半	3年	E
⑤	男性	30代後半	14年	F
⑥	男性	40代前半	17年	G
⑦	女性	30代後半	15年	F
⑧	男性	60代後半	38年	F
⑨	女性	50代前半	23年	H
⑩	女性	30代前半	13年	I

表 1. 半構造化面接調査協力者

筆者作成

3. 倫理的配慮

人権の保護及び法令の遵守を配慮した上で行った。参与観察・半構造化面接ともに、事前に児童養護施設 A の施設長及び調査協力者に研究内容を説明し書面にて同意を得た。本研究は所属機関(大阪大学)の倫理委員会の承認を得た上で実施した(登録番号 OUKS1818)。

4. 研究結果

本調査から、児童養護施設における子どもの性（生）は、以下の4つの要素(a、b、c、d)を背景に、一種の装置のような「フィルター」がかけられていることが示唆された。

a.児童養護施設の子ども特有の背景への職員の意識：職員は子どもの性（生）にまつわる言動に関して、児童養護施設の子ども特有の背景である被虐待経験等との因果関係を意識した対応を行う。例えば、子どもが他者との適切な距離を築く難しさや性的マイノリティであることを複雑な家庭背景や被虐待経験、性的被害との関連で捉えている。

b.児童養護施設の子ども特有の立場：子どもが措置され保護されている立場であることが、子どもの性（生）にまつわる事柄に対する職員の意識や対応に影響を与えている。例えば、施設内恋愛を禁止している施設がある。また、施設として「責任がとれない」という観点から、保守的な性（生）教育をせざるを得ないという語りがあった。

c.児童養護施設の職員特有の立場：職員の、親ではなく職員であるという理解、またその特有の立場が子どもの性（生）にまつわる事柄に対する意識や対応に影響を与えている。職員は、子どもとのスキンシップをとることや控えることに対しても、躊躇や葛藤を感じる。また、男性職員が性加害者として訴えられる危険性があると認知していることも対応に影響を与えている。男性職員は、子どもとのスキンシップを控え、性的な加害行為として疑われる可能性のある洗濯物の取り扱い等の家事を意識的に控える傾向にある。

d.集団養育・施設生活：集団養育を行う施設生活が影響している。例えば、大勢の子どもの前では1人の子どもの性的な言動に面と向き合うことが難しいため、言動の背後にある思いや訴えをその場では聞くことはできず、頭ごなしに注意する。また、入浴について、「みんな裸を見せるのが全然普通になっているから」という職員の語りから、集団生活のもたらす影響が明らかである。

5. 考察

児童養護施設における子どもの性（生）は、上述した4つの要素(a、b、c、d)を背景に「フィルター」がかけられ、語られていることが示唆された。それは、性（生）は典型的な枠にはまるべき、避けるべき、躊躇や葛藤が伴いうる、抑圧されうるといった認識を子どもに与える可能性のあるフィルターである。これらは、被虐待経験等や措置され、施設にて職員に集団養育されているといった弱くされた立場を子どもに想起させる。親から見放された喪失感を抱く子どもが生きる力を見出すためには、弱くされた立場への着目ではなく、子どもの潜在力や回復力へ焦点を当てることが欠かせない（中村 2015）。また、弱くされた立場を強調する援助は、独自性や多様性などの育みを排除する（スミスほか 2018）。性（生）が生活の中でどのように語られているのか、改めて問い直す必要がある。

参考文献：マークスミス・レオンフルチャー・ピータードラン（2018）『ソーシャルベダゴジーから考える施設養育の新たな挑戦』明石書店。中村直樹（2015）「児童福祉援助と『子ども中心アプローチ』：子どもの権利と要保護児童の当事者性をめぐって」『北海道教育大学紀要』65（2）、45-56。白井千晶（2019）「児童養護施設における性的マイノリティ（LGBT）児童対応調査（ヒアリング調査）結果インタビューと隠れたカリキュラム」『人文論集』69（2）、41-55。